

現代社会福祉の基本的視点としての包摂

○ 淑徳大学 本多 敏明 (会員番号 007470)

〔キーワード〕 包摂、相互浸透、排除

1. 研究目的

非正規雇用者の増大、失業率の悪化、社会保険料の滞納、そして社会保障諸制度から抜け落ちるなどして結果的に親しい人びととの関係も乏しくなっていく人びとが増えており、こうした事態は社会的排除 (social exclusion) として注目され、社会福祉ないし社会政策において流行の概念となっている。しかしながら、社会的排除およびその対概念である社会的包摂 (social inclusion) は実態としてどのような状態を指すかがいくぶん曖昧である。

包摂および排除の概念が曖昧であるゆえんは、両者が次のような二つの次元に関わっているからであると筆者は考える。ひとつは「機能の次元」であり、社会にとって人間が機能を果たす (労働などによって「役に立つ」) ことができるならば包摂され、そうでなければ排除されるといった次元である。もうひとつは「存在の次元」ともいうべき次元であり、「役に立つ／役に立たない」ということで包摂と排除が分かれるのではなく、その人と関わりのある他者がその人に対して関心を向けその人がそこに存在することを承認してくれることが包摂であり、反対にその人が物理的に存在しても周りの人びとからまったく顧慮されないことが排除であるような次元である。

包摂および排除が注目された当初は、上記の「機能の次元」のみに焦点が当たっていたきらいがあるものの、近年では「存在の次元」への着目が少しずつ広がってきている (阿部 2012)。本報告では、「機能の次元」とともに、いかにして「存在の次元」も視野に収めた包摂と排除の概念を構築しうるかを考えたい。

2. 研究の視点および方法

現代ドイツの一部の社会福祉の研究者や実践者から包摂と排除を分析するための理論的資源とみなされている、社会学者ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann, 1927-1998) の包摂／排除、および包摂／排除を理解するうえで重要な相互浸透 (Interpenetration) の概念を分析する。そのさい、ルーマンの包摂と排除、および相互浸透が、社会と個人の間を焦点においた概念であることに注目する。

3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会研究倫理指針に準拠している。

4. 研究結果

ルーマンによると、相互浸透は、人間と社会の双方が関わることによって互いに貢献し

合うことを言い表しており、この相互浸透に深く関わるものとして包摂が定義されているのである（Luhmann 1989）。簡略化して言えば、ルーマンは、社会が人間のちからを利用することとして包摂を定義している（Luhmann 1989 : 162）。そして包摂とは反対の事態、つまり人間が社会のちからを利用することを言い表すために、社会化（Sozialisation）の概念が提示されている（Luhmann 1989 : 162）。言い換えれば、一方における包摂は、人間（心理システム）のちからが社会において活かされることを表しており、他方における社会化は、社会のちからが人間（心理システム）において活かされることを表している。

ここで強調しなければならないことは、包摂は、人間のちからによって社会が活性化されることとして捉えられている点である。誤解を恐れずに言えば、個人のちからが社会の活性化のために活かされるということである。ただし、この包摂が意味しているのは、人間が社会のための一方的な道具だという見方をルーマンがとっているということでは決してない。なぜなら、包摂をとおして個人のちからによって活性化された社会のちからが、翻ってまた個人の活性化（能力の開花や感性の豊饒化など）のために活かされるという循環的な事態を相互浸透として捉えようとしているからである。その意味では、社会が十二分に力量を備えていなければ、素晴らしい能力を備えた個々人を包摂することができないし、当人の人間的な豊かさやさらなる成長も見込めないということである。包摂と社会化は、合わせて相互浸透を意味しており、人間と社会が循環的に相互に貢献し合う関係を言い表している。

5. 考察

排除されている人、排除されつつある人はややもすると「社会のお荷物」と捉えられがちである。しかし、そのように排除の問題を、当人の個人的能力・資質に由来する「個人の問題」と捉えたままでは包摂は進まないだろう。

以上、確認してきたように、排除は、排除されている個人のちからがその社会のなかで活かされていない不足の事態であるといえる。排除された当人だけの問題ではない。

排除の問題の解決を探るとき、また包摂の指針を探るとき、そのさい問われているのは、人間が社会にとってどれだけ役に立つかという「機能の次元」だけでなく（もちろん「機能の次元」も重要であるが）、なによりも個々人の「存在の次元」をいかに視野に収めうるかということである。

誰かを完全に包摂できなくとも、その人を包摂しようとする支援する人びとの工夫の積み重ね、そして人びとの関わりの活性化がその社会のちからを育み、そうした社会のちからが包摂の可能性を少しずつ育む側面を積極的に認めたい。